

令和7年度 教育事業 「ボランティアフォローアップ研修」

1 事業概要

本年度の事業に参加した法人ボランティア12名が集まり、発言しやすい雰囲気の中での情報交換を通して、「新しい仲間への存在にも気づけてよかった。」「ボランティアに対する情熱が伝わり、来年度も積極的にボランティア活動をしたと思った。」等、互いの交流を深めたり、今後の活動への意欲を高めたりした。また、火おこしやプロジェクトアドベンチャーを体験することで、体験活動への知識や技能を高めた。

事業の目的を十分に達成できたため、今後はより多くの法人ボランティアが集まり、自ら企画運営するような形態を目指したい。



2 事業の目的（ねらい）

ボランティア活動についての協議や演習を通して、体験活動に必要な知識や技能を習得することによって、ボランティア活動に取り組み意欲や実践力を高めたり、法人ボランティア同士の交流を深めたりする。

3 企画のポイント

参加者の中から募集した運営補助メンバーに進行やアイスブレイクを任せ、情報交換においては、BGMや湯茶等など話しやすい雰囲気作りに努めることで、事業の目的を達成することができた。プロジェクトアドベンチャー講習にも参加することで、ボランティア同士や職員との交流を深めるとともに、体験活動に必要な知識や技能の習得にもつながった。

4 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

5 期日 令和8年1月31日（土）～2月1日（日） 1泊2日

6 場所 国立大洲青少年交流の家

7 対象 法人ボランティア 10名程度

8 参加人数 参加者12名（高校生3名 大学生8名、社会人1名）

9 参加費 4,000円（社会人は10,500円）

10 日程	【1月31日（土）】	【2月1日（日）】
	13:45 受付	6:30 起床
	14:00 開会行事	7:30 朝食（森のレストラン）
	14:30 火おこし体験	8:45 退所点検
	15:30 懇親会（各事業の情報共有）	9:15 プロジェクトアドベンチャー講習①
	17:00 タベのつどい	12:00 昼食（森のレストラン）
	17:20 夕食（森のレストラン）	13:00 プロジェクトアドベンチャー講習②
	18:00 入浴	16:15 閉会行事
	19:30 情報交換会	16:30 解散
	22:30 就寝	

11 活動内容

【1日目 1月31日(土)】

○火おこし体験

運営補助ボランティアのアイスブレイクにより緊張がほぐれた状態で、まいぎり式とメタルマッチでの火おこしを体験した。まいぎり式が難しくどのチームも苦戦した分、火おこしが成功したときにチーム全員で歓声が上がった。



○懇親会（各事業の情報共有）

たき火を囲み、それぞれが参加した事業の概要や、ボランティアの役割、感想の情報共有を行った。参加していない事業や自分以外のボランティアの思いを知ること、次年度の事業への意欲が高まる様子が見られた。



○情報交換会

ボランティアミックスキャンプにおける発表内容、今後目指す大洲ボランティアの在り方、次年度の養成講座・自主企画の中核メンバーについて協議した。今後の大洲ボランティアについては、高校生をいかに巻き込んでいくかが話題の中心となり、次年度の中核メンバーについては参加者のほとんどが意欲を示した。



【2日目 2月1日(日)】

○プロジェクトアドベンチャー講習

プロジェクトアドベンチャー日本の加藤氏を講師に迎え、プロジェクトアドベンチャーの概要や理念について学ぶとともに、実際に体験した。体験の中で、法人ボランティア以外のメンバーとの交流を深めるとともに、アイスブレイク等の知識や技術を学ぶことができた。



12 参加者の声

○事業後アンケート結果（参加者）

*満足 91% *やや満足 9% *やや不満 0% *不満 0%

【参加者の声】

- ・職員のサポートもあり、ボランティア同士が手を取り合う体制ができたため、すごくよい経験になった。
- ・他の人の経験や動機なども聞くことができ、有意義な時間になった。
- ・初めてのまいぎり式火おこしは大変だったが、火種に火がついたときには達成感があった。
- ・どんなときでもこのつながりを大切に、人生をプラスにしていけたらと思う。

13 事業の成果

アンケートより、目標としていた「意欲の向上」「知識・技能の向上」「交流の深化」の3つ全てにおいて十分に達成することができたため、一定の成果を上げられたのではないかと考える。今回は特にコミュニケーションの場を多く設定したため、たき火やBGMといった雰囲気作りや湯茶コーナーの設置が目標達成にむけて効果的に作用したのではないかと考える。

14 事業の課題

定員はオーバーしたものの、より多くのボランティアに参加してもらえるよう多くの方に連絡をしたが、参加者数はあまり伸びなかった。1つでも事業に参加したボランティアのほとんどが参加するような事業を目指すとともに、いずれは、ボランティア自身が事業を企画し運営する形態を目指したい。

（担当：企画指導専門職 有木園 和志）